

二 次の記事を読んで、あとの問いに答えなさい。

合奏会の練習があった日の帰り道、見村めぐ美はパートリーダーの小磯利久雄と一緒に帰ることになった。次の文章はそれに続く場面である。

閑散とした道が終わり、公園前を歩き出す。

落ち葉を A 踏みながら歩く。

それまで黙って先を歩いていた小磯が、ふいに振り向いて、

「あ、そうだ。フヨミ、明日までだから」と言い、走って行った。

その言葉がきっかけだった。めぐ美の中に、ポツポツと溜まりつつあった感情を、心の縁から初めてこぼすことになる、その一滴。

「小磯！」気づいたら叫んでいた。

びっくりするほど大きな声が出た。

振り向いた小磯に向かって、めぐ美は走った。近づいてきためぐ美の顔が涙で濡れているのを見た小磯は口をちいさく開け、

① ぼかんとしたその顔で、

「こけたの？」と訊いた。

間が抜けたようなその幼い顔と質問に、めぐ美はつい笑ってしまい、笑ったまま、

「フヨミって何？」

やっと、訊くことができた。それってスマホで検索すればいいだけだったなと閃いて、自分のばかさにまた笑ってしまった。でも、誰かに教えてもらいたかった。自分が誰にも訊けないでいるということを、めぐ美は思い知らされていたから。リッチーにも、まやまやにも、カナにも。先生にも、きょうだいにも、ママにも訊けなかったから。いつもめぐ美は、訊けなかったから。小さなことも大きなことも、訊けなかったから。

色々なことがごちゃ混ぜになって、めぐ美の心に降ってくる。【Ⅰ】がふくらんで、息がくるしくなる。目の奥が熱く腫れてくるようで、次第に痛み出してきて、気付いたら泣いていた。こんなことで、わたし、泣く。前にいつ泣いたのかをめぐ美は思い出せなかった。だけど、今日は泣いている。両頬をつたう涙は、めぐ美にとって、どこか非現実的で、かえって破れかぶれな気持ちにさせるくらい。

涙を流しながら笑うめぐ美を、不気味なものを見るような目で見ながら、

② ？ 譜読みついでいたら、譜読みじゃん」小磯が言う。

「だから、意味が分かんない！ なんだよ、フヨミって！」めぐ美は涙をぬぐって、大きな声でもう一度訊いた。

「は？ 楽譜で音を取ることだよ」

「音を取る」

「ドレミ……つての。覚えてから、弾けるようにする」

「それ、小磯が、やったの？」

「は？ おれがやるってどういうこと」

「『は？』『は？』つて、うるさすぎ。仕方ないじゃん！ あたし、楽譜、読めないんだから！」

「なんで」

小磯に無邪気な顔で訊かれたせいで、めぐ美は、これまで持っていた恥ずかしさが、実はすぐくちっぽけなものだったように思えた。

「読めないんだから、読めないんだよ！」③ 開き直って言った。

「だって、音楽で習わなかった？」

「忘れちゃったよ！ そんなの」

小磯は「仕方ねえなあ……」と B 眩きながらランドセルを肩からはずして足元に置く。教科書やプリントが C 入れて

ある奥のほうからうすいクリアファイルを出した。『ブラジル』の楽譜が入っていた。

「いいよ、これ」

と手渡される。広げると、音譜のおたまじやくしの下、ひとつずつにその音がなんなのかを示す「ドレミファソラシド」のカタカナ

と、ドなら1、レなら2というふうに、指使いの順番が書いてあった。

「これ、小磯が全部書いたの？」

めぐ美が言うと、小磯は頷いた。リーダーを押し付けられた小磯が、家でこれを書いていた姿が【Ⅱ】に浮かんだ。

「大変だった？」めぐ美は訊いたが、小磯はそれには答えず、

「見村んち、ピアノってある？」と訊く。

「ない」

「え、ないの!？」

「あんたんちみたいで、でっかいピアノが二台もある家のほうが異常なんだよ」

昔、遊びに行った時、小磯の家に大きなピアノがあつてびっくりしたのを思い出した。

そういえば小磯の親はピアノを教えているし、小磯も小さい頃からピアノを習っていたはずだ。だったら、このくらい、簡単に弾けるに決まっている。むしろ、なんでこんなにびっしりドレミを書いているのだろう。

「あのおさ、ネットで鍵盤の絵とか拾って、ここに書いた音譜と見合わせれば、弾けるようになるんじゃないか？」

「無理、無理。どれがドかとか、分かんないもん」

「それも、ネットに鍵盤の絵があるから、それ見れば」

「えー。無理」

「なんで」

「なんでって、無理だもん」

「なんでも簡単に無理無理言うなよ。おれだつてこれやるの三時間くらいかかったよ」

「④え、あなた、ずっと前からピアノ習つたのに、なんで？」

「知らねえよ。おれのことはいいだろ。※Safariで『ピアノ 鍵盤』って画像検索すればたくさん出てくるし、あと、学校で弾く時、

アコーディオンのドとソんとこに、セロテープ貼つとけば。透明だから気づかれない。目印になるから」

「名案じゃん、それ」

「おれ、前に鍵盤ハーモニカで、やってた」

「……小磯、すごいね」

「別に、すごくないし」

小磯は口を尖らせた。褒められて照れたと見え、力を込めている口元がびくびくつと動く。その顔は、一緒に図書館に行った頃から

それほど変わらないふうにも見えた。

「じゃあ」と小磯は言い、⑤急に足を速めて歩き出して行ってしまう。と思ったら振り向いて、

「明日じゃなくてもいいから」と言った。

「何が」

「明日までって言ったけど、もつとかかかってもいいから」と言って、また歩き出す。少し歩いてまた振り向いて、

「できないところは弾いてるふりしてもいいから」と言った。

めぐ美はさつきまで泣いていたのが嘘みたいに、⑥爽やかな気分になった。その手にあるのは「フヨミ」のために借りた楽譜だ。大切に持って、落ち葉の道を歩いてゆく。

（朝比奈あすか『君たちは今が世界』より）

〔注〕※Safari：インターネットで調べる時に使うソフト。

問一 A C にあてはまる語としてそれぞれ適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ばつさり イ ぐしゃぐしゃに ウ かさかさ エ しぶしぶと オ ぶつぶつ

問二 【Ⅰ】・【Ⅱ】にあてはまる語としてそれぞれ適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 指 イ 頬 ウ 目 エ 肺

問三 線部①「ぼかんとした」とありますが、このときの「小磯」の気持ちを四十字以内で説明しなさい。

問四 線部②「『は？』譜読みついたら、譜読みじゃん」とありますが、このときの「小磯」の気持ちとして適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 泣きながらも次々に質問をしてくるので、うまく聞き取ることができず、とまどう気持ち。

イ 自分が質問したことでめぐ美が泣いてしまったのではないかと思い、不安になる気持ち。

ウ 誰もが知っているはずの簡単なことを聞いてくるめぐ美のことをかわいそうに思う気持ち。

エ 泣いたり笑ったりしながら簡単なことを聞いてくるめぐ美に対して変に思う気持ち。

問五 線部③「聞き直つて言った」とありますが、その理由として適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 楽譜を読めないことは自分だけではないと知り、安心したから。

イ 楽譜を読めないことに対する恥ずかしさが小さくなったから。

ウ 何度も「は？」と言ってくる小磯にだんだん腹が立ったから。

エ 小磯に対してごまかすことは不可能である気がついたから。

問六 線部④「『え、あなた、ずっと前からピアノ習つたのに、なんで？』」とありますが、このときの「めぐ美」の気持ちを四十字以内で説明しなさい。

問七 線部⑤「急に足を速めて歩き出して行ってしまう」とありますが、その理由として適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

記号で答えなさい。

ア めぐ美からほめられたことがうれしかったけれど、早く家に帰りたいと思う気持ちを優先してしまつたから。

イ めぐ美からほめられたことにおどろいて、うれしさをおさえることができず、ついまいあがつてしまつたから。

ウ めぐ美からほめられたことがうれしかったけれど、その気持ちをめぐ美に気づかれないようにしようと思つたから。

エ めぐ美からほめられたことにおどろいてしまい、その場にいることが嫌になって逃げ出したいと思つたから。

問八 線部⑥「爽やかな気分になった」とありますが、それについての説明として適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今までは聞きたいと思つていたことも聞けなかったが、小磯からアドバイスをもらい、すっきりしたのでこれから頑張ろうと思えている。

イ ピアノを習っていた小磯でも譜読みに時間がかかると知って、合奏会に対する自信が強まり、明日からの練習を頑張ろうと思えている。

ウ 小磯から譜読みのことを教えてもらい、楽譜も貸してもらえたので、譜読みができるようになった自分に自信を持つことができる。

エ 小磯がアドバイスをくれて楽譜も貸してくれたことで、譜読みができなくても本番は大丈夫だと安心し、晴れやかな気持ちでいる。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

たしかに人間は、よりよい生活をするため、地球上に広がった人類の食料のため、自然からエネルギーを得てきた。多くの発明や発見がそれを支えてきた。今まではそれでよかったのかもしれない。こうした発明や発見は、やがて君たちが学ぶ物理学や化学の分野のことが多い。それに基礎をもった工業技術が人間の生活を変えてきた。①これは一種の進歩だったともいえる。でも、人間が自然のなかのひとつの要素にすぎなく、いくら人間の科学技術が発達しても、自然のもっている大きな制約のなかでしか生きられないのも事実である。

君たちの食卓にのぼる食べ物を思い浮かべてみれば、それはよくわかるはずである。穀物にしろ野菜にしろ果物にしろ、もちろん肉や魚はもとも自然の構成要素のひとつである。いくら科学技術が進んでも、ブリやニホンミツバチは人工的にはできない。そして、これらは本来、人間に食べられるために存在しているものではない。栽培植物や家畜は一見、自然とかなり近いものに思えるけど、人間がしていることは、かれら自身が生き続けることができる条件下で、その※上前をもらっているにすぎない。栽培植物や家畜は、地球上の数えきれない種の数のなかでわずかな種類にしかない。野生植物や野生動物なら、乱獲すれば②それが消滅してしまうことは当然である。それは、地球上の開発可能などころすべてで栽培植物を作り、家畜を飼う世界を想像してみればいい。どんな世界に나ると思う？

人間はどうも③自然のなかのひとつの生き物にすぎないことを忘れてきている。そこでぼくが述べてきた人びとと自然の関係を思いだしてもらいたい。ぼくが述べてきた人びとの自然に接する方法は、かんたんな道具でうまく自然と折り合っている。A、かんたんな道具だけで自然からほしいものを手に入れることはできない。ぼくは、それには自然に関する深い知識が必要だと言いたいわけである。

技術というのは、道具や機械と、それを使いこなす知識の総和ではないだろうか。技術というのが、自然に向かうのではなく人間の生活だけに向かうときは、道具や機械を使いこなす知識はかんたんであればあるほど使いやすい。

ぼくはときどき考える。最初のほうで述べた※アカ・ピグミーの人がネットハンティングで最後に槍で動物をしとめることと、ぼくたちが車に乗るとそんなにちがいはないのではないかと。だって、ぼくたちは車に乗るといったって、実際はアクセルとブレーキとハンドル操作だけを知っていて、車の内部がどうなっているのか、ほとんどの人は知っていない。操作することだけなら、槍と車にそんなにちがいはない。

ぼくは、自然と向きあうときに必要な道具とそれを使いこなす知識と書いたけど、この知識には二つあると考えている。その一つを、ぼくは④身体的技能と呼んでいる。これは、万吉じいさんの「※山アテ」という知識を思い浮かべてもらえばよくわかるだろう。一本釣りは、船の上で釣り糸と針と疑似餌だけでおこなわれる漁だけど、どこで何をどう釣るか、山を見て、潮を見て、風を見て船や釣り糸を動かす。これは身体で覚えている技能であって、「山アテ」の原理がわかったからといって、明日からブリが釣れるわけではない。知識を本当に使えるためには、長いあいだの経験が必要である。経験しながら、また新しいことを自分で発見していく。こういう性質のものだ。

いま一つ⑤生態的技能と呼んでいる。阿比留さんのニホンミツバチや※ヤーシンのヒツジの放牧を思いだしてもらえばいい。蜂蜜をとったり、ヒツジを放牧したりするとき、対象となる自然、つまりニホンミツバチやヒツジの生態や習性をよく知っているかどうかが大事なことだ。こうした人びとはいまままで、一本釣りの名人とかミツバチ飼いの名人といわれてきた。B、かれらの技能をカンとかコツと呼んできた。カンとかコツといってしまうえば、もうそれ以上のことはわからないけど、もともとこうした技能は、人にはなかなか伝えにくいものだ。でも、けっしてカンとかコツですませてしまうわけにはいかないほど、かれらは対象の自然について深い理解があることはいまままでの話でわかってもらえたと思う。（中略）

ぼくたちが現在忘れてきていることというのは、この身体技能や生態的技能のことだ。a本来、自然に向きあうときの技術とはこういうものであった。でも、ぼくたちの世界は、【Ⅰ】や【Ⅱ】とそれを使いこなす知識のなかで、道具や機械だけが増え続け便利になってきた。そして、それを使いこなす知識はマニュアル化され、だれがおこなっても同じ結果や収穫ができるようになっていく。携帯電話ならこれでいいかもしれない。でも、自然から食物やさまざまな素材を得ることはどうだろうか。

そして、人間が自然から離れば離れるほど、自然界で何が起こっているのかわからなくなる。ぼくたちはそんな世界に生きている。携帯電話をつくるさまざまな素材だって自然から得た資源だけれども、使う人はもうそれがどこでだれがどのようにとっているか知らない。そして素材をとる人、加工する人、組み立てる人がいて、さらに使う人はますます自然界から遠ざかっていく。ぼくたちはみんな⑥「最後に自然とつきあう人びと」になってしまいかもしれない。携帯電話ならそれを使わないで生活できるかもしれない。しかし、ぼくたちは食べ物を食べないわけにはいかない。それが自然界に重大な影響をあたえているとすれば、これはもう人類全体の問題である。

（篠原徹『自然とつきあう』より 問題作成のため一部改編）

（注）※上前をもらう…人の取り分の一部を自分のものにする。

※アカ・ピグミー…中央アフリカで暮らす民族。網を使って野生動物の狩りを行う。

※山アテ…陸地の風景を使って、漁場を正確に知るための技術。

※ヤーシン…イラクでヒツジ飼いをする少年。

問一 A・B にあてはまる語としてそれぞれ適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア なげなら イ けれども ウ それとも エ そして

問二 【Ⅰ】・【Ⅱ】にあてはまる語句の組み合わせとして適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア Ⅰ道具・Ⅱ機械 イ Ⅰカン・Ⅱコツ ウ Ⅰ発明・Ⅱ発見 エ Ⅰ対象・Ⅱ自然

問三 線部 a「本来」 b「加工」とはどのような意味ですか。それぞれ次のア～カの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 姿を見せること イ いつも変化しないこと ウ もともとそうあるべきこと

エ 材料に手を加えること オ よい状態を保つこと カ 規則を守ること

問四 線部①「これは一種の進歩だった」とはどのようなことを述べているのですか。説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間がよりよい生活を求めることは自然と無関係だということ。

イ 人間の発明や発見によって様々な環境問題が起こったということ。

ウ 発明や発見が工業技術に結びつき人間の暮らしを変えてきたこと。

エ 人間は工業技術の発展によって労働時間が増えるようになったこと。

問五 線部②「それ」とは何を指すのですか。文中から九字でぬき出しなさい。

問六 線部③「自然のなかのひとつの生き物にすぎない」とは具体的にどのようなことだと述べられていますか。解答らんのに合うように文中から二十五字でぬき出し、最初と最後の三字を答えなさい。

問七 線部④「身体的技能」とはどのようなことですか。三十字以内で説明しなさい。

問八 線部⑤「生態的技能」とはどのようなことですか。説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ミツバチを飼う名人として、なかなか人には言えないような特殊な道具を使っているということ。

イ ヒツジの放牧をするためには、カンとかコツと呼ばれるような技能は必要ないということ。

ウ 蜂蜜の採取やヒツジの放牧を数多く経験することで、簡単に使いやすい知識を身につけること。

エ カンとかコツとか呼ばれる、対象となる自然や生き物の生態や習性に対する深い理解があること。

問九 線部⑥「『最後に自然とつきあう人びと』になっってしまった」とはどのようなことですか。三十五字以内で説明しなさい。

三 次の 線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字にそれぞれ直しなさい。

① 交通の不便な所に住む。 ② 友人との約束を果たす。

③ この部屋は快適だ。 ④ 植物採集をする。

⑤ めずらしい切手を集める。 ⑥ 学校と家をオウフクする。

⑦ コウシヤからグラウンドを見る。 ⑧ 車のスピードをセイゲンする。

⑨ リエキの多い商売をする。 ⑩ 冬になってキオンが下がる。

⑪ 朝は7時に起きるシュウカンがある。 ⑫ アンセイにして休む。

⑬ ノートにキロクしておく。 ⑭ 友達の誕生日をイワう。

⑮ あたたかいキセツになる。

問題は以上です。